

勝林寺寺報

惑業凡夫信心発

証知生死即涅槃

必至無量光明士

諸有衆生皆普化



夏の暑さも時を越え、朝晩少し肌寒さを感じるようになってきました。年々暑さの厳しさが増し、地球温暖化がますます深刻化しているようです。夏の盛りに坊守と一緒に神戸に出ることがありました。新神戸トンネルを出たところで、車の中でも余話がしづらいような蝉の鳴声に驚きました。勝林寺の境内の蝉は私が阿弥陀経をあげると一緒にノドカに唱和してくれるのですが、どうも都会の蝉はその勢いが違うようでした。聞くところによると、"クマゼミ"という南方から来た蝉のようで、身体も大きく、声も大きいのだそうです。そして、このクマゼミのいるところにはあの小さい"ミンミンゼミ"は姿を消すそうで、今年境内でミンミンゼミの小さな抜け殻をあまり見かけなかつた気がします。

親鸞聖人の教行証文類に「蟋蟀(けい)春秋を識らず、伊虫(いちゅう)あに朱陽(しゆよう)の節を知らんや」という墨書き大師の文が引かれています。蟋蟀(けい)、というのは「蟬」のことだそうで、蟬は夏に出てきて夏の間に死んでしまうので、春も秋も知らない。春も秋も知らないのだから、蟬は今が夏である」ともわかるといふと、蟬は卵から生まれて六年間、暗い土の中で硬い殻をかぶって生きてい

るのだそうです。そして長い年月を暗闇の中でモゴモゴとすこした後、やつと夏の明け方に地中から這い出し、羽根を広げ、飛び立ち、ミンとなくなります。しかし、その命は短く、ミンミンと元気に鳴くことができる命はたったの七日間だそうです。真夏の七日間をただ鳴いて過ごす蟬は、さぞ暑がろうとも思うのですが、春のさわやかさも、秋の涼しさも知らない蟬は、夏が暑いともわからずただただ鳴き通すのです。

暑ければクーラーが欲しいと文句を言い、お経が長いと椅子がなければ座つていられないと愚痴を言い、お念佛は三回で良いのか、六回言わなければならないのか、教えてもらわないとお念佛できませんと比較競争しながら念佛してい人間からすれば、暑いも寒いも言わずただ短い命をひたすら、一心に鳴き続ける蟬の鳴きざまを、現代人は見習うべきかもしません。

私たち人間の一生は今八十九十才と、蟬に比べればずいぶん長いようです。それでも、私自身六十を過ぎたにもかかわらず、蟬の七日とは比べようのない人生の短さ、はかなさを感じます。そして、生きることにしか興味がない生きる前も生きることが終わつた後も問題にしないで、忙しく飛びまわり、死ねばすべてはペーーとなくなるとしか考えられない現代人の生は、蟬が春も夏も知らず、ただ夏のみに生きるがゆえに夏もわからないのと同じく、本当の生が分からぬままなのです。念佛信心の中で命は多くの命の縁の中にあり、この命は無量の命の中に帰る命であることを知ることができ、生が生だけでなく、生死即涅槃として知ることができる教えこそが浄土真宗のみ教えなのです。

(文責 住職)

ご報告

仙婦・子ども研修会

今年も、住職の誕生日である八月十九日、二十名（うち二名はうれしい中学生ボランティア）の子どもたち十四名のお手伝いの方の参加をいただき、「仏婦・子ども研修会」を盛大に開催しました。

七日間もほつとする一日でした。お焼香をしたり、正信偈を称えたり、恩徳讃を歌つたりする合間に（どつちが合間か分かりませんが）どんなじやんけんをしたり、紙飛行機を飛ばしたり、流しそうめんをしたり、スライムを作つたり、絵本の読み聞かせを聞いたり、川遊びをしたり・・・あつという間の一 日でした。年齢も違う人間からすれば、暑いも寒いも言わずただ短い命をひたすら、一心に鳴き続ける蟬の鳴きざまを、現代人は見習うべきかもしません。

九月一日（月）

兵庫教区 公聴会

但馬医療福祉連携会

伝建現場見学会

数森正彦宅 七回忌

八日（日） 岩上定幸宅 十三回忌

夜久野 専福寺 十三回忌

三日（火）

兵庫教区 公聴会

但馬医療福祉連携会

七日（土）

伝建現場見学会

数森正彦宅 七回忌

九日（月）

兵庫教区 公聴会

但馬医療福祉連携会

七日（土）

伝建現場見学会

数森正彦宅 七回忌

九月一日（月）

兵庫教区 公聴会

但馬医療福祉連携会

教えについて

人間というもの

人間は誰でも、それぞれが生まれつきの独な体質、能力、性格を持つてゐるものであります。それは先天的生得的な因子というべきもので、いわゆる DNA（遺伝子）といわれるものです。私たちの人生、その生涯のありようは、ひとえにそのようなもつて生まれた因子によつて形成され、限定されていくわけです。しかしながら私たちの人生、その生涯のありようは、また私たちがこの世に誕生した後、いかなる人間と遭遇するか、どういう心の教育をうけるかによって、決定的な方向性が成立してくるものです。それは後天的習得的な因子というべきもので、生涯教育、その学習効果の重要性を意味します。

人生といふものは、一寸先は闇です。何が起きてくるかわかりません。その意味においては、生まれつきの因子はそれとしても、私たちがそれぞれの人生生活をどう生きしていくかについては、その後天的な因子としての、いかなる人と出会い、どういう心の教育を受けてきたかが、決定的な意味を持つものです。昔の人々は、地域の寺院にお参りして仏法を聴聞し、それぞれの厳しい人生を、いかに生きていくべきかを、心深く学んだものです。

しかしながら、今日においては、そういう人生生活をめぐる心の学習を修めることが、ほとんどなくなってしまいました。そして現代人は、もつぱら物質的、金錢的な豊かさのみを求めて、心を育てて、自立して生きることを見失つてしましました。今日の日本ではすでに十数年来自死者が増加して、毎日平均百名近い人々が、自らの生命を絶つてゐるわけですが、現代人の未成熟、その人生に対する学習の不充分さが、改めて問われてくるところです。

教えという字義

「教」という漢字は、左側の偏の孝という字と、右側の旁（つくり）の父という字とが、組み合と子が合わされたもので、父とは「まじわる」

ことをあらわして、交の字の原型です。かくして父と子とは、子どもが大人、先生と交わることを意味して、「学ぶ」（まねをする）ことをいいます。そして旁の父とは、もどかと書いて、人間の動作、ここでは与えることをいい、先生が子供に教えることを意味します。

かくして「教」とは、求めることと、与えることの合字です。だから教えとは、そういう求めの人と、与える人が、よく相応してこそ、はじめて教えとなるわけです。どれほど立派な教えでも、求めるものがいなければ、何の意味もありません。まったくの猫に小判、豚に真珠のたぐいです。

私たち現代人の生活は、それなりの豊かさを築いておりますが、精神的な生活、心の豊みはまことに不充分です。それの人生生活、家庭生活をかえりみると、厳しく反省されてくることがあります。まつたくの猫に小判、豚に真珠のたぐいです。

私は、もつと教えを学び、心をより豊かに育てつつ、生きてゆきたいのです。

（信楽峻磨遺稿法語集より引用）

法語カレンダー九月

わがこころ よければ
（おもづからず）

どすん

寺報の発行日が近づくのに「どうん」に書くことが決まらない。。。と頭を抱える私を見かねた誰かが

（…）私に貴重な経験をさせてくれました。その報告記。

月末に、東京に行つてきました。但馬空港から伊丹、羽田と乗り継ぐと家を出て三時間余りで東京に着きます。（早）一 楽しい一日間を過ごして、東京を二時三十分の飛行機に乗ると家に六時に着く予定です。「晩御飯は?」「今夜のドラマは?」頭の中には今晩の予定が浮かびます。異変は、伊丹に着いたときに始まりました。

『飛行機の到着遅れで、出発が二十五分遅れます』のアナウンス。「あら六時には帰れないわ」あと少しで機内に案内されるというとき、いきなり大雨。するとアナウンスで『天候の様子を見ているので、出発が遅れます』「あらあら」そしてそのままお待ちください』「えり…」ちょっと不安になつてきました。伊丹到着からすでに一時間が経過しています。そしてついに『悪天候のため欠航が決まりました。』一緒に待つっていた社員会見学の小学生から「えーーー」の声（私も）。係のお姉さんにイライラをぶつけるおじさんもなく、荷物を受け取り、払い戻しを済ませ、電車で帰る段取りを進めます。まずは、モノレールで移動し、阪急に乗り換えてさらにJRに乗ります（はーー）ところが、JRの駅で待ついている特急が来ません。なんと、人身事故のため大幅な遅れでいつ来るかわからないとのこと。「あちやーー！」もう笑うしかないですね。結果普通電車を乗り継いで、家に着いたのは日付が変わった十二時過ぎでした。東京を出発してから九時間が経過していました。（遅い…でも面白かつた！）東京で何してきつたけ？（文責 坊守）